

『研究』

— 知的創造の面白さ —

川 廷 宗 之

大妻女子大学名誉教授・学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター センター長

<研究、こんなに面白い活動はない…。>

『研究』の在り方に関しては、それぞれの研究者で色々な考え方があろう。専ら、社会福祉（人間の福祉・幸福・の追求）や、ソーシャルワーク（社会福祉実現の方法）や、福祉教育などの研究に関わってきた私は、『研究』を、概略、以下の様にとらえている。これを読まれるあなたは、『研究』という活動をどう整理されておられるだろうか。

『研究』という活動は、とても面白い活動である。なぜなら、それは未知の真理の探究であるからである。そして新たな真理（科学的成果）の発見は、その後の生活や様々な（職業）実践を変えていく力を持っているからである。その研究成果が人々の幸福（喜びや楽しみや人生の充実感を得ること）に繋がっていくからである。

<疑問や、矛盾の発見からはじまる研究>

真理を探究することで真理の発見につながるには、まだ見いだせていない真理がある筈だという仮説を持つことが必要だろうし、その前に、なぜこれはこうなっているのだろうという疑問を持つことが必要だろう。その疑問は小さなことでもかまわない。「真理」の探究というと大げさに聞こえるかもしれないが、ノーベル賞に関わってくるような大袈裟な真理（疑問）の追求でなくても、日常生活の中で感じる様々な疑問に対する答え（細かな法則）を探る研究でも構わない。一つ一つの小さな発見や法則が積み重なって、大きな法則や真理に到達するという場合もあるだろうし、一見小さな発見が、大きな法則やそれらの真理の根幹をひっくり返してしまう場合もあるだろう。

対人援助などでは、自分では当然だと思っていたり（教科書的な文献に執筆者の思い込みが書いてあったり）することが、他で色々学ぶ内容や生活の現実と「矛盾してしまう」場合は少なくないだろう。生活現実と文献にかかっていることと、どちらが人間の幸福と適切につながるかを確認する必要に迫られることは多々ある。その意味で自分の思いこみやテキスト類の記述を疑ってみることはとても重要な事であるし、対人援助実践も状況に流されて余り考えないでいい加減に対応するのではなく、丁寧に点検しながら進めることはとても大切である。この丁寧な過程からは、多くの未解決の課題（研究のテーマ）が生まれるであろう。たとえば、対人援助実践に取り組む前と、取り組んだあとでの利用者さんの変化など（全く変化しないということはおかしい）について考えたり、日本国憲法の前文や第3章（国民の権利及び義務）の条文と私たちの暮らしの現実を比較してみたりなどしてみれば、其処に様々な矛盾を発見するのは、とても容易な事であろう。

勿論、疑問や矛盾の解決の必要性が生じる場面は、日常生活や職業や趣味的な活動等多岐にわたる。『研究』としては、どういう場面のどういう問題であろうと、最終的に人々の幸福追求に結び付けばよいので、『研究』の範囲は極めて広い領域にまたがると考えてよいだろう。また、現代社会は様々な事が複雑に絡み合っているので、『研究』がある領域だけでは完結しない場合も少なくないだろう。

<文献や先行研究の探索>

これらの疑問や矛盾の解決を追求していく時に最初に行うことは、先例を調べることである。文献や

論文などや、最近では様々なネット情報（これは虚偽の情報も多いと言われているが）などを調べることであろう。これを行うには、まずはテーマに関するキーワードを選んで、そのキーワードからネットで検索をするという方法になるだろう。

このネットを使って検索をするという方法が確立したのは20年くらい前の事である。その前は、図書館に行って文献カードを1枚1枚めぐりながら関連しそうな文献や論文を探し出して、読んでみるという作業から始まった。最近では、ネットを使ってキーワードですぐに検索できるのでものすごく楽になっている。が同時に、関連しそうな文献を読みこなすという作業の中でヒントを得るといった過程が少なくなっていて、研究の奥行き（や広がり）が浅い内容になりがちなのが気になる。また、このことはキーワードの設定に関しても同様のことがいえる。当該のテーマでのキーワードは、その研究領域ではこういう用語になるということや殆ど考えずに、思いついたままのキーワードを入れても知りたい内容の文献や論文を検索出来るとは限らない。多くの場合、最初は問題意識もぼんやりしている場合が多く、自分が考えていることは、どういう用語で表現されているのかも不明確で、その意味ではキーワードも丁寧に吟味される必要があるだろう。例えば、「教育方法」という用語で検索をかけても、高等教育領域の文献や論文や、少し古い研究は見落としてしまうことが多いだろう。なぜならば、かつては「教育方法」というよりは「教授法」という言葉の方がポピュラーだったからである¹⁾。こういう連想が働くためにも、基本的な文献を適切に読みこなしている必要がある。

このように、何かを調べようとする時には、どういう言葉で検索をかけていくか、キーワードの選択はかなり慎重に行う必要がある。そしてそのためには、当該領域の基本的な文献（古典・基本文献）を読んで関係する言語概念や、隣接領域との関係などの確認なども、行っておくことが大切である。日常生活の当面する疑問や矛盾への当面の答えを探す場合はともかく、真理としての答えを探すには、この程度のことは行っておく必要がある。最近の論文には、基本文献を読んでおくという基本的な事が十分には行われていない場合もあるようで、既に解決

していると考えられるテーマを基本文献よりも浅いレベルで論じているものが出てきたりして、驚かされることもある。

このような作業（先行研究の調査・survey）を行って言語概念や隣接領域を含む研究の枠組みを整理したうえで、検索で出てきた文献や論文を読んでみることになるのだが、これも最近ではヒットする文献や論文が多すぎて読み切れない場合が少なくなっている。その結果、さらにキーワードを増やして絞り込みをかけるというのが一般的な手法であろう。しかし、ここでも気を付けなければならない点がある。適切な問題解決や真理を探究する場合は、キーワードがヒットしたから適切な資料が出てくるとは必ずしも言えないという点に留意しておく必要がある。検討すべき事項は、その資料がどういう根拠に基づいてどういう推論がおこなわれているのか、書いた人は誰なのか、どういう資料に掲載されているのかという点を点検しておく必要があるだろう。ネットの検索では著名な研究者が書いた古典も、昨日仮名で誰かが書いたガセネタも同じようにヒットしてくる。この中でどの資料を使うかはしっかり選ばなければならない。少し学習をしていれば、この領域の先達は誰とか、どこ（大学、学会、企業・政府、ほか）で主に研究されているとか、どういう資料に主な論文が掲載されているとかは分かってくるのである程度の選択はできるようになる。そのためにも基本文献を読んでおくことはとても大切である。

このようにして絞り込んだ文献、本や論文を読んだりした結果、問題解決のために先行研究内に納得のいく法則（真理）が見つければ、それはそれで一つ解決で有ろう。どうしてそれが解決なのかという理由や思考の経過（論理）を含めて、この探索経過を「論文」や「研究ノート」としてまとめておくことも大切である。学術誌にもこういう文献研究を中心とした「論文」は良く取り上げられている。（いわゆる、書齋研究…）

但し、多くの場合、今問われているのは、論理的に納得しても、実際の問題解決が可能かどうかである。そういう場合は、現実の問題解決に適用して見て、解決可能かを試してみるという「追試的研究」もあり得る。いわゆる再現実験である。社会科学的な研究では、状況設定が異なるので、この種の再現

実験的研究はなかなか難しいとされている。しかし、科学的な実践の発展のためには、応用を含めた追試的研究も大変重要であり、検討されるべきことであろう。

＜研究活動…フィールドワークの開始…研究倫理…＞

相当程度にこの探索を行っても、納得のいく答えが得られないときは、いよいよ具体的な『研究』（フィールドワーク）の開始である。この時、探索中にこういう答えになるのではないかという仮説が浮かんでくる場合もあるであろう。仮説などは浮かばず、問題の焦点すら見えない場合もある。このどちらかで、その後の研究の方法が違ってくる。前者の場合は仮説検証型の研究になるし、後者の場合は探索型の研究になる。また、先行研究を探索している内に、探求（研究）のターゲットとすべき領域もかなり絞られてくるだろう。

いずれにせよこのような研究を始める時に、特に対人援助に関する研究を行う場合は考慮しておくべきことがある。それは、その研究が誰にとってどういう意味（意義）を持つのかということである。この種の研究を行うには、多くの場合多数の方々のボランティア的な協力をお願いする必要がある。ご協力いただく理由は、（その方々を含む）人間の幸福追求に役立つからというのが理由である。とすれば、「当該研究はどのような方々のどういう問題解決に有効だから」という、研究を行う「社会的意義に関する」理由説明が必要であろう。この理由が曖昧だと、研究者の個人的趣味で行う研究になりかねない。（特に最近では研究者としての業績評価を、研究の数で行う傾向もあるため、「研究のための研究」も散見される。）『研究』の最終的な目標は真理の発見であり、その真理は、生活や実践を変えていく力に繋がっていく必要がある。生活や職業での実践を踏まえない、単なる空理空論を色々と研究しても意味がない。研究としては、言葉の遊びはいらぬ。（一種の芸術として楽しむのは良いだろうが。）どんどん変化している社会の動向を踏まえる必要もある。従って、論文には、その研究をする意味がどこにあるのか、何を明らかにすることで、社会にどう役立ちたいのか、当該研究の社会的意義に関して適確な説明が必要である。この点を明示しておくことは大

変重要だろう。

一方、最近の傾向としては、単に人間の幸福追求のみならず、動物の福祉や権利も大きな課題となっている²⁾。この点は、日本ではまだ「動物福祉」的な「動物愛護」的な捉え方が主流だが、国際的には動物の権利として内容もきちんと整理されている。研究上は動物を使った実験等も行われる場合も少ないが、これらの考え方への配慮も必要であろう。ということは早晩、植物を含む生態系全体への配慮を考えなければならなくなるだろう。人間の幸福追求は当然地球という生態系の基礎を置いているのであるから、個々の研究では一見関係が薄いとしても、そういう総合的な目配りは欠かせない。

＜厳密性を問われる研究方法…求められるのは「結果」ではなく「結論」＞

近年の研究（フィールドワーク）においては、根拠となるデータや、研究方法の厳密性を要求するケースが増えている。研究を通じて得られる真理は、人々の生活を変える可能性を秘めているのだから、その結果は正確に適切でなければならないの言うまでもない。それゆえ、基礎データの収集の仕方や、そのデータから推論を積み重ねていく手法は、研究方法方法として確立されたものであることが望ましい。

最近の数量的研究とも呼ばれている統計調査法を使った研究では、特にコンピュータの活用が進み、統計データの分析がやりやすくなったりしてきた点の影響が大きいだろう。また、事例を中心としたケース研究などから発展してきた、質的研究とも呼ばれるいわゆる観察研究に関しても、コンピュータを活用した言語検索方法などの発展もあり、研究方法が発達しているという影響が大きいだろう。

しかし、研究で一番重要なのは、言うまでもなくその研究からなにが分かった（どういう真理を引き出したか）という結論である。その「結論」部分が、研究の出発点であった、「問」である疑問や矛盾解決への答えになっていなければ、意味がないというに近いであろう。研究方法が如何に適正であり、その研究からどんな「結果」が出ていると説明だけであっても、その研究はそれで完成とはならないのではないだろうか。

勿論、それほど大きな研究費を使える立場でもない一研究者が、一つの研究でそれなりの「結論」などを出す研究ができるわけがないという考え方もあり得るだろう。しかし、先に述べたように、当面する疑問や矛盾の解決（問題解決）を求められるからこそその研究であれば、その研究は、たとえ最終結論に対しごく一部でしかないとしても、それなりの結論を提示すべきであろうと思う。

『研究』を、調査して結果を報告すれば、それでよいと考えたとしたら、その行為はどういう社会的意義があるのだろうか。民間企業などの実業の世界でも、国家や地方自治体の行政などでも、その後はどう活用するのか分からない研究はありえないのではなかろうか。現実の実際の生活場面を生活している人々は、そういう『研究』をどう思うであろうか。勿論、その方の趣味で全くの私費で、（書齋科学の様に）他の人の協力を得ることもなく、自分個人でやっているなら、そういう趣味的な活動もあり得るかもしれない。しかし、アンケートなどや取材などを通して多くの方々との協力を得て行う研究を『研究論文』として発表する以上は、やはりそれなりの「社会的意義」がなければ困るのではなかろうか。

<査読者という立場で>

以上述べたことは、すこし発想が古いかもしれない。状況はどんどん進んでしまうので、結論がどうなるかは分からないが、とにかく当面の結果だけ報告するという論文がありえないわけでもないかもしれない。しかし、やはり「研究論文」として発表する以上は、その研究は、私なりに言えば、この程度の事は考えておいて欲しいと思う。あるいは、明確に異なる研究観を提示していただくということもあるかもしれない。

一応私も、ソーシャルワークや福祉教育や社会福祉が専門ですと名乗る、研究者として認めていただいている。その結果、また最近余りお断りしないせいもあり、査読や研究計画などの評価を依頼されることが増えた。自分ではろくな研究もしてきていないのに、他者の研究計画の評価や査読などして良いのだろうかと思いつつ、自分でも学会誌の編集を行った事もあり、査読を依頼する大変さも知っているので、なるべくお断りしないようにしている。

その査読や、研究計画の評価をしながら、最近、強く感じた点が、上記に記した「研究観」で有り、研究の手続きに関してである。

特に気になるのは、この論文（研究成果）は、誰にとってどういう意味を持つのか、という事である。論文の冒頭には、「序論」とか「問題の所在」とか「研究の目的」とかという表題で、何故その研究を行うのかとか、何を明らかにしたいのかが書かれているのが普通だと思う。しかし、最近の論文はこの部分の記述が如何にも荒っぽい論文が多いのである。現実の問題を扱っている論文も少なくないが、その研究をする事でどういう社会貢献につながるのか、記述されていない。文献中心の論理的問題に取り組むのではなく、現実問題を扱うのだから、この点には当然触れられていて良いはずであろうと思うのだが、この問題を調べてどう役立つのだろうと考え込んでしまう論文も少なくない。

また、次に考えるのは先行研究調査の荒っぽさである。最近の論文は引用文献以外の参考文献は記述しないのが普通なので、当該論文を作成するまでにどういう基本文献を読んでいるのかが分からない。が、それにしても、先行研究の点検が荒過ぎるような気がする。ということは、その論文で取り上げているテーマが、どういう独自性を持っているかを証明できていないということに繋がるであろう。真理の探究を目指す論文発表というのは、言うまでもなくそこで出されている真理（結論）が全く新しい発見であるということが求められる。勿論、これはそう簡単なことではないが、少なくとも先行研究では未解決になっている分野を取り上げるという当該研究のオリジナリティ（独自性）を主張できなければならぬ。そのためには、隣接領域の論文などの検討を通じ、その点を証明しておくことが望まれる。

次に言えるのは、前述のように研究方法に強くこだわっていて、研究調査の結果しか書いていない論文である。調査結果しか書いてないのであれば、それは調査報告書であって、研究論文とは言えないのではないかと私は思う。

<なぜ、こうなっているのか…。研究テーマ設定への疑問…>

なぜ、こうなっているのかを考えてみると、やは

り一番気になるのは、研究のスタートラインである、疑問や矛盾の解決などの「問い」（研究テーマ）の設定の仕方であろう。大学や専門学校で授業を行いながら、研究も続ける人々にとって、明らかにしたいテーマは何なのであろうか。ここ数年、私が気にしているのは、私の研究分野での話であるが、自分が当該分野の専門家として授業を行っている専門領域ではなく、授業そのものに関する「教育」研究が多い事である。授業という行為もまた多くの問題を抱えているのだから、それはそれで十分に研究対象になりえるのだが、私が見る所、専門領域を離れての教育のテーマが多すぎるような気がする。

なぜ教育研究になってしまって、その方々が専門とする領域の研究が余り行われていないのだろうか。多分、それは、教員兼研究者である人々が学校の中に閉じ込められてしまっていて、現場に出ないからだろうと思う。現場にいれば、其処でのいろいろな矛盾や問題に日々さらされているので、研究テーマはいくらでもあるであろう。しかし、現場から離れてしまうと、何が問題なのかが見えなく（感じなく）なるのではなかろうか。

一方で、現場での研究活動も盛んとは言にくい。多分、福祉（や介護などの対人援助等）の現場では、日々仕事に追われていて研究開発どころではない、あるいは問題を解決する意思がない（解決しない方が儲かる??）人が多いということなのだろうと思う。研究者となっている人も問題を感じている現場の人も、目の前の問題を解決するための研究ができない（しない）状況では、福祉現場の実践が良くなるわけではないので、福祉（介護）サービスの消費者からも信任を得られないし、その結果、業界全体が伸び悩みになっている様に思う。

一方では、福祉（幸福の追求）に関わる分野では、教育分野もそうであるように、一般の方々でも誰もが色々と課題にぶつかっているケースや、問題関心を持つ人も多い。結果的に、全く専門領域の異なる実践現場をよく知らない（あるいは極めて特定の経験しか有しない）人々による『介護や福祉研究』がどんどん入ってきたりもする。このことは、うまく現場研究とかみ合えば、大変大きな研究成果を上げられるのだが、かみ合わない介護ロボットの研究にみられるような、現場のニーズとはかみ合わな

い様な頓珍漢な代物を作りだしてしまうような研究が行われたりして、それでまた、現場がかき回されることになったりする。

<現場研究と専門教育実践>

いずれにせよ、今求められているのは、人々の暮らしの中での幸福につながるような、現実的な問題解決に関する研究である。これらの研究を活性化するには、研究者としても研究教育機関としてもどうしたら良いのだろうか。

一つは、研究教育機関には、医学部が必ず附属病院を持っているようにサービス実践機能を持つ機関を付設させることであろう。もう一つは、研究者兼教員がとにかく現場に出て問題意識をもって研究にあたることであろう。その為には、教員は週1～3日を授業等を行うべく学校で活動するとすれば、残り2～4日を現場でサービス実践に従事するといった条件を確保することであろう。こうすることで、生産的な研究が進んで、その蓄積が増していけば、当該サービス分野の発展に寄与し、其処でサービスを受けようとする人々の幸福にもっと素晴らしいサービスが提供できるようになるのではなかろうか。

繰り返すが、そのためには、やはり研究も行い論文の書き手でもある教員が自ら行動を起こしていくことがとても大切になるであろう。

<知的生産＝研究＝が当たり前だった時代>

なぜ、私がそう考えるか、いささか蛇足的にはなるが、私自身がどう研究とかかわってきたか、どういふ失敗をしてきたか、少し体験を紹介して置こう。ある意味では、もう歴史上のことになり、知らない方も多いであろうから、少し懐古趣味的にはなるが、読者の参考になれば幸いである。

1969年、今から48年前に『知的生産の技術³⁾』という本がでた時、就職したばかりの私はそれを読んで、すごく感激をして、自分専用の知的生産用のB6判の京大型カードを大量に印刷した覚えがある。この時に何万枚か印刷したカードは50年後の今もまだ多少残っていて、色々なことに使っている。この頃、後にKJ法として有名になる『発想法⁴⁾』も出っていて、この2冊を讀んでいないサラリーマンや大

学生はいないのではないかと思うくらい、発想法を踏まえて新しい知的生産は極めて常識的な事であった。

そこでは、新しい着想が大変重視され、システムであれ、物であれ、その内容さえよければどんどん実用化されていくという時代だった。逆に言えば、漸く『マイ・カー』の兆しが見えていた時期でもあり、今から考えれば、それだけ「物」も「システム」も「論文」も「研究の積み重ね」も何もなかったとも言えるのではあるが、専門学校を含む大学に進学する人も、まだ同一年齢で20%程度だった時代で、まさに、学歴など関係なく猫も杓子も知的生産ブームであった。言いかえれば、それだけ『研究』や『開発』は高学歴者に限らず誰にとっても身近なものであった。

実際問題として私も、就職先に新しく創られた地域福祉や社会教育の専門職ポストについたせいもあり、仕事も最初はどのように良いか解らず、学生時代の実習先の方々に電話を掛けまくって教えてもらいながら、また、担当地域を歩き回って地域の方々に教を請いながら、色々な方と話しながら、一つ一つ手作りで仕事を創って行った覚えがある。まさに仕事の内容は、それらの情報を総合した知的創造の世界だった。当時、職場には次々と新しい課題が降ってくる時代だったせいもあり、毎年新しい事に挑戦し、色々な計画や施設や事業を創って行った覚えがある。また、その中で、色々なテーマで原稿の依頼を受けるようになった。この原稿（論文）を書くために自分の実践を分析しなおし、色々な情報を集め比較検討をしながら新たな知見（情報・論文）を創造する面白さを知った。そうなると、自分で考えて施策化した内容を発信したくなり、自分から書いて投稿したり、専門の学会に入り、其処での発表を勧められてするようになったり、少し本格的な研究の世界に触れることになって行った。そして言うまでもなく、この研究内容は、即、職場の実践として展開され、検証されていった。

その頃の私の研究は、ほとんどが（学術誌ではなく）商業雑誌からの依頼された仕事であったり、研究テーマ自体が前例のほとんどない新しいテーマであったりしたせいもあり、結局は実践を踏まえつつ自分で色々と考えて理論化を図って行くという内容

だった様に思う。周りでの研究も多くはその様な内容で、かつ実践を踏まえた研究方法をとっていた。つまり当時の研究を振り返ってみると、

- ①現実の実践に極めて近いレベルでの課題を取り上げ、理論化を目指していた、
- ②従って、その内容は現実の実践の集約であるか、あるいは書かれたのちに即、実践で検証されていった、
- ③従って、研究方法も調査とか言うよりは、現実の実践を検証するというものが多かった、
- ④当然、当該の研究は、研究のためと言うよりは実践をどう改善するかとか、困っている問題を解決するための展望を切り開くための、極めて現実的な研究が多かった。

ある意味でいえば、当時『研究』は発想重視であり、先行する研究等も今から考えれば極めて少ないし、今の様に検索のしようもないわけだから、一部の大学などの特別な世界はともかく、問題があればとにかく解決を迫られているので、研究手続きなどは余り考えずにどんどん新たな知的生産がおこなわれていったといえよう。大ざっぱに言えば、この流れに乗って進んでいた頃の日本での研究成果の一部が最近、ノーベル賞に輝いているとも言えるだろう。

当時、周囲を見回しても、（私にとって）面白い研究成果としてでてくるものは、生活現実の中にある「困ったこと」を解決していく研究が多かった。たとえば、日本の工業の特徴として、1980年頃から「軽薄短小」ということが言われるのだが、様々な生活や生産の現実では、いうまでもなく、同じ機能を果たすなら軽くて薄くて短くて小さい事は便利になり良いことであり、それによって生活が変わっていく事であった。このように、そこでは、目に見える形に現実化する研究が盛んに行われていたのである。≪このようにして厚くて重いSPレコードは、軽く薄いドーナツ版のレコードになり、一層薄くて軽いCDになり、3.5インチの小さなフロッピーディスクになり、そしてUSBになった。途中で、テープも出来たのだが、これもオープンリールと呼ばれる8インチや5インチに巻いたテープからカセットテープになり、フロッピーディスクに統合されていった。このフロッピーディスクの頃から、音楽も音声も映

像も全部が一つのシステムに統合されていく形で、圧縮が進んだ。>

<現場を離れると知的生産＝研究ができなくなった…>

就職してから20年ほどして、私は高等教育の世界（半分は研究を業とする世界）に転職した。現職の途中で文科省の研修機関での職場を離れて長期研修に参加させていただき、大変勉強になったのだが、その成果を現場に活かさなかったと自分で思う頃から、実践現場での仕事には何となく限界を感じていた。転職は大変幸運に恵まれ、大学の教員にはなったのだが、そこでの問題は、自分の専門分野についての論文が書けなくなったことである。転職して1～2年は勢いで何とかしたが、3年目くらいでそのことに気が付いて、結局研究テーマを、福祉研究から教育研究を中心に定めることになった。それまでの研究も教育に近い分野が多かったこともあり、移行するのは比較的容易だったが、授業内容は現場からだんだん離れ貧弱になっていった。結局、現場研究を再開できるようになるまでの当時の数年間は、実践から離れていて関連研究も貧弱で論文も余り書いておらず、授業で語るべき内容に乏しく、福祉サービスの面白さを伝えることはできなかった。（と本人は思っていた。受け止めた学生は、必ずしもそうではなかった様ではあるが…。）

授業で元気を取り戻したのは、昔の現場の仲間との研究会を持つようになってからである。この研究会の過程で、現場にも行ける様になり、実践を進める様々な技法の開発を行い試行することで、漸く研究も行えるようになった。

<最近の知的生産は手続きばかりうるさくて>

就職した頃からほぼ50年の歳月が流れた。今や、高等教育機関への進学率は80%に迫り、ある意味では『研究』や『開発』を行う能力を持った人は圧倒的に増えたはずである。しかし、言うまでもなく近年の日本では、誰でもが参加するような研究がそれほど日常的に行われているわけではない。また、大変細かな分を取り上げた研究というか調査報告は増えているのだが、それなりのユニークな研究（論文）にもトンとお目にかからなくなった（と私は思う）。

何故なのだろうか。

一つは、あの頃から50年、特に最近30年くらいは、物凄い勢いで論文と称される物が量産され、様々な機器も開発・発売され、システムもどんどん改善発展しているからなのだろうと思う。また、皆で色々やれるべき改善等の研究はやりつくしてしまっただけで、もはや素人っぽい人までもが首を突っ込んでいく「研究・開発」は行えなくなっているのかもしれない。様々な量の拡大は、同時にそれらを整理するルールも極めて細かくなってきた。そこで、ある着想が湧いたら、それを研究して論文にまとめていくためには、それまでの蓄積を踏まえ、それらに対する独自性を証明する手続きを求められる様になった。この先行研究の検索が馬鹿にならないのである。インターネットが普及する前は、先行研究の蓄積もそれなりの専門雑誌を読んでいればチェック出来たのだが、最近ではそれでは全然足りなくなり、もはや専門誌はどんどんWeb上に移行し、旬刊が月刊に、そして週刊になり、もはや新しい情報はリアルタイムでWeb上にアップされるようになった。

<新たな『研究』の領域へ>

言い換えれば現実的有効性を持たない研究論文っぽい物の組成乱造が進んでいるということなのかもしれない。それを防ぐために、学術誌では「査読」と呼ばれる手続きがうるさく行われるようになり、また、先述の様に研究手続きが細かく問われるようになった。しかし、一方で福祉サービスなどの対人援助領域では、現実の問題はどんどん増え続けているし、それらの問題を現実的な解決に近づけるような研究も一層必要とされている。

しかし、今、研究を行うのは、大変である。先行研究も膨大に増え読んで置かなければならない文献や論文もふえた。解決すべき問題の質も複雑になり難しくなっている。それゆえ隣接領域の研究にも関心を持っている必要も出てきた。また、テーマ設定として求められる解決すべき問題を適切に把握するための現場実践や現場体験にも時間がかかる。これらを総合する研究を行うためには、一人で行うのは難しく、色々な方とチームを組んで研究を行うことも求められている。その意味で、研究的力量も高いレベルが要求されている。そのレベルに達するに

は、習作的研究を重ねることも必要であるし、小さな研究の積み重ねも必要である。

が、やはり最も重要なのは、起きている問題を解決するために研究を行うという研究者としてのミッションであり、研究のヴィジョンを描きうる学習の積み重ねであり、困っている人を見捨てないために頑張りを続けるパッションなのではないだろうか。そう考えるならば、今は研究を進めたり開拓したりしていくために非常に良い状況である。なぜか。それはAIやICTの急激な発展に伴う社会の激変が進みつつある（始まっている）時期だからである。ある意味では、今までの研究があまり意味をなさない様な新しい状況が生まれつつあるからである。そこでは新しく生まれてくるテーマに、新しい方法で取り組んでいく必要が出てきている。色々な研究を見直し、新たな研究を始めていくある意味で絶好のチャンスといっても良いだろう。そして、その新しい状況の打撃を最も被っているのは、まさに実践の現場である。

一コマ一コマの授業も大変ななかで、研究活動を

続けるのは、容易なことではなかろうと思う。しかし、やはり良い授業を行うためにも、未来を切り開く研究を行っている後ろ姿から学生たちに学んでもらうという側面も大きい。

この「敬心・研究ジャーナル」が、そういう皆さんの研究の後押しをできる様に、また、職業教育研究開発センターが皆さんの研究や授業をバックアップできる様に、頑張っていきたいと考えている。

〈注〉

- 1) 両方の単語で検索をかけてみると、教授法では1170万件、教育方法では3950万件が出てくる。かなり似た概念なので、教育方法だけを検索すると約1/5強の情報を見落とすことになる。
- 2) 「動物の権利の世界宣言」1978年・ユネスコ。「動物福祉」という概念もある。
- 3) 梅棹忠夫著『知的生産の技術』岩波新書・1969年7月刊／現在も新刊で入手可能
- 4) 川喜田二郎著『発想法 — 創造性開発のために（中公新書1967年刊／現在も新刊で入手可能・のちにKJ法と呼ばれる発想法を世に普及させた本）

受付日：2017年2月15日